

# 「思想間の対話」とは何か、それはなぜ必要か

藤田正勝

## 1 なぜ思想間の対話が必要か

トマス・クーンが『科学革命の構造』において、異なったパラダイムを有する者のあいだでは有意義な対話や相互批判を行うことができないということを主張したのに対し、カール・ポパーは「フレームワークの神話」のなかで異なったフレームワーク間の議論はきわめて困難であるが、しかしそこでこそ、議論が実り多いものになりうることを主張した。異なった立場から困難な問いを問いかけられたときにこそ、われわれの見解は強く揺さぶられ、それ以前と異なった仕方でものごとを見ることができからである。われわれは他者との対話を通してこそ、自らの思想を相対化し、その思考の枠組みを流動化し、そこから思想の新たな発展の可能性を探っていくことができる。

## 2 思想間の対話は容易ではない

しかしもちろん、対話は容易ではない。そのことを九鬼周造とハイデガーとのあいだでなされた「対話」を手がかりに見てみたい。ハイデガーは『言葉への途上』に収められた「言葉についての対話から」のなかで、かつて九鬼と「いき」について話し合った際に、ある「危険性」に気づいたことを記している。「いき」という日本の芸術の根底にあるものについて語りあいながら、すべてのものが「ヨーロッパ的なもの」のなかに移し入れられていたからである。「東アジアの人々にとって、ヨーロッパの概念体系を追い求めることは、必要かつ正当なものであるのか」という問いをハイデガーはここで提起している。われわれは、この、異なった思想のあいだにある「危険性」を乗り越えて、はたして対話を行うことができるのであろうか

## 3 思想間の対話とはどのような営みか

われわれのものの見方には、たいてい先入見というものがまわりついている。隠された前提があると言ってもよい。たとえば西田幾多郎の『善の研究』を例に取れば、西田はそこでその思索の歩みを、「疑ひうるだけ疑つて」というように、デカルトとともに始めている。デカルトは『省察』において、「われわれは何であれ働きというものを、その主体（基体）なしに思い浮かべることはできない」と述べ、われわれのあらゆる行為の前提に主体の存在があることを主張した。それはラテン語など、ヨーロッパの言語の言語構造を考えたとき、矛盾なく導きだされる結論である。しかし、それとはまったく違った構造をもつ言語を話す人にとっては、決して絶対的な前提ではない。実際、西田はそのように行為に先立って主体の存在を前提することを「独断」としてした。

われわれはそれぞれの言語の構造や、それを基礎にしたものの方見方の上に立って、世界を理解し、さまざまな判断を下している。そこに隠された前提に気づくことはまれである。しかし（あるいはそれだからこそ）、対立する見解、対立するものの方見方を対置し、比較すること、つまり対立するものが互いをいわば鏡として相互に映しあい、それぞれの思想が先入見の上に成り立っていないかを検討することは、きわめて重要な意味を持つ。われわれが「対話」のもとに具体的に考えているのは以上のような事態である。そこから、事柄をその根源にまで問い進めていく力が生まれてくると考えている。